

## 疲労困憊その2

2025. 11. 13

県北新人大会団体戦はリーグ戦である。最初の難関を突破できた。次の試合は、クラブチームが相手である。勝つのはむずかしい。思い切ってやるだけである。かえって、いい練習になる。その次の試合には勝つことができた。

予選リーグ2位で、次の準決勝リーグに進むことができた。あと2勝である。次の難関と思っていたチームが意外にも負けた。やはり、これがリーグ戦である。必ず思いがけない結果になる。我がチームは、勝つことができた。あと1勝である。これがむずかしい。相手チームもこちらも、勝ったほうが県大会ということはわかっている。

相手チームは、一度負けているためか、それまでとは違った。気持ちが入っていた。こちらは勝つことを意識してしまったのか、力を出し切れずに、2ペアが負けてしまった。この時点で、チームとしては負けである。

だが、最後の3ペアめが勝てば、得失点差で県大会に行けることはわかっていた。このことを選手には伝えなかった。伝えないほうがよいと判断した。試合は、何とか勝つことができた。それでも、誰も喜んではいない。チームとしては負けている。選手も保護者も県大会に出ることはできないと思っている。みんながっかりしている。

本部に確認した。やはり、得失点差で上回り、県大会出場が決まった。そのことを選手たちに伝えた。最初は、ボカンとしていた。リーグ戦の得失点差のことをわかっているのだろう。ちょっと間があった後に、歓声が上がった。みんな大喜びだった。

まだ試合があった。3・4位決定戦である。相手は、クラブチームである。もちろん、勝つのはむずかしい。整列した。願ってもない対戦となっていた。選手に言った。「よし、勝ちにいこう！」一月前であれば、クラブチームと聞いただけで、あきらめてしまっていた。ところが、少しずつクラブチームでも戦えるという手ごたえを感じるようになっていた。

この試合では、相手に向かっていくことができた。試合は、一進一退の攻防が続き、どちらが勝つかわからない展開となった。最後は負けてしまったが、クラブチーム相手でも十分にやれるということを証明することができた。相手チームは、さぞ肝を冷やしたことだろう。

この日は、計6対戦、18試合を行った。ずっと、アドバイスをしながら、どうすればよいかを考えていた。戦術よりも、選手にどんな言葉をかけるかがポイントだった。最後の試合では、ナイター照明がついた。もう暗くなっていた。だが、表彰式に出ることができた選手たちと、その様子をスマホに収める保護者の皆さんは輝いていた。

こちらは、疲労困憊だった。いつも大会のときには疲れる。体重が一気に減る。今回は、重症だった。家に帰っても動きたくなかった。ぐっすり眠ることができると思っていた。ところが、疲れすぎて眠れなかった。次の日も、疲れはとれなかった。動く気にもなれなかった。こんなことは初めてだった。それだけ、神経を使っていたということか。いや、これが年を取ったということだろう。ぐったりだったが、価値のある疲れである。こういった疲労困憊はよいものである。選手たちと保護者の皆さんと顧問の先生に感謝したい。